

防災と危機管理の教訓28項目を学問へ

重点研究高度化推進本部特命教授 広瀬 研吉

私は昨年（2011年）の3月末から内閣府本府参与として福島第一原子力発電所事故への対応を支援することになりました。内閣府に属する原子力安全委員会と官邸との連絡調整をすることが役割となり、計画的避難区域等の設定や放射性物質の総放出量の評価等を担当しました。その後は、国際原子力機関（IAEA）への報告書のとりまとめ作業に参画することになり、昨年6月の第1回の報告書と9月の第2回報告書のとりまとめとIAEAにおける報告に参画しました。

福島第一原子力発電所の事故からの確かな教訓を導き出していくことは重要なことであり、上記のIAEAへの報告書では、津波への対応、電源の確保、確実な冷却機能の確保、水素への対応、長期化する事故への原子力防災対応など28項目の教訓がとりまとめられています。これらの教訓と今後さらに得られる様々な教訓を徹底的に活かすように取り組むことは、我が国にとって重要であるだけでなく、我が国の世界への責任でもあります。

福井大学では、福島第一原子力発電所の事故が発生したおよそ1年後に附属国際原子力工学研究所が敦賀を拠点にした新たな展開を図っていくことになりました。そのような観点からみますと、今後の本研究所の活動は、大きく（1）高速増殖炉の研究開発と教育、（2）原子力防災・危機管理の研究教育、（3）国際的人材育成、の3つを大きな柱として進めていくことが重要になると考えられます。特に（2）と（3）は福島第一原子力発電所の事故を踏まえ、今後の積極的な展開が重要になります。

今後の原子力開発においては、原子力防災・危機管理を徹底することなどにより、最終的に今回のような重大な事故に至らないようにすることが重要です。原子力防災・危機管理についてはこの事故から多くの教訓が得られました。これらの教訓を含めて原子力防災・危機管理に関する多様な事項を分析して体系化し普遍的な学問としての基

盤を築くことが重要です。それは事故の発生国である我が国の世界に対する責任です。本研究所における原子力防災・危機管理部門は、この分野の学問としての基盤を構築しそれを発展させる役割を積極的に果たして、世界への責任を果たす一端を担っていくことになると思います。

原子力開発の先進国の一つとして我が国が原子力の次世代を担う世界の人材の育成に積極的に携わることは我が国の世界への重要な貢献です。また、それは我が国が世界から得た多くの協力からみれば我が国の責任とも言えます。本研究所は人材育成における国際貢献を重要な役割の一つとしています。前述の原子力防災・危機管理を含めて高度な原子力の工学的知見を世界の若い世代に習得してもらい、彼らが世界の様々な原子力の利用や研究の場に飛躍してもらうことが期待されます。国際的な人材育成は、世界的な標準を基礎にして行われることなどが必要になり、そのような意味からは我が国が原子力への取組みの国際性を高めていく機会にもなります。

福島第一原子力発電所の事故は我が国にとって大きな苦難ですが、そこから我が国が立ち上がり世界に貢献していく中で、本研究所が活動し前進していくことを確信しています。